

世界をみつめて

アイルランド探訪1

—ダブリン—
澤田 俊明

アイルランドはイギリスの西に位置する国だが、美しい自然とケルト文化に彩られている。人口は約392万人（2002年）で、ケルト系のアイルランド人が大部分を占めている。アイルランドの第1公用語はゲール語で、第2公用語が英語である。そのため街の標識はこれら2つの言語で書かれている。アイルランドで最も重要な植物はクローバーに似た三つ葉のシャムロックである。アイルランドにセント・パトリックがキリスト教を伝える時に、シャムロックを用いて父と子と聖霊の三位一体説を説いたのは有名な話である。またアイルランドには妖精に関する興味深い話も多く残っており、ダブリン空港でもアイルランドの代表的妖精レブラホーンのグッズを売っていたりする。アイルランドを何度か訪れたことがあるのだが、そのたびにおもしろい発見があった。そこで今まで私の訪れた地域を中心にアイルランドの魅力とは何なのかを考えてみたい。

まずアイルランドの首都ダブリンから始めたい。ダブリンはバイキングがリフィー川の河口付近に841年に建設した集落がその始まりとされている。バイキングたちは略奪もしたが、交易も行った。ダブリンはバイキングの交易の中心地として発展をしていったところだ。ダブリンにはセント・パトリック大聖堂をはじめ、数多くの歴史的な建造物や寺院があるのだが、意外に知られていないにもかかわらず興味深い博物館がダブリン・バイキング・アドベンチャーだ。これは展示博物館ではなくて体験型博物館である。見学者は当時の船に乗り、リフィー川沿いのバイキングの集落を見学することで、バイキング到来時のダブリンの姿を思い起こすことができる。3年前にここを訪れた時にはバイキングの服装をしたスタッフがいて、どこから来たのか、日本の酒を持ってきたかなどと尋ねられた。

ダブリンにはトリニティ・カレッジという由緒ある大学があるのだが、ここの図書館にはケルト芸術で有名な「ケルズの書」がある。「ケルズの書」

とは聖書の写本で、9世紀にケルトの修道僧によって書かれたものだ。この本にはケルト独特の渦巻き文様や動物文様が美しく描かれており、展示室で見学することができる。



ダブリンの繁華街で、文化的発信地ともいえるのがテンプルバー地区である。ここにはレストランやパブやギャラリーや各種の店が集まっている。いくつかのパブではアイルランドの伝統音楽の生演奏をしており、踊りも見ることができる。私はテンプルバーのフィッツモンズというパブに行き、ギネス・ビールを飲みながらアイルランドの伝統音楽を楽しんだことがある。ギネスというのはアイルランドの誇るビールで、世界120カ国以上に輸出されている。ダブリンにはギネス醸造所（ギネス・ストアハウス）もあり、ギネスの歴史を学んだ後はダブリンの街を眺めながらギネスを楽しむことができる。世界一を集めた本としてよく知られているのが『ギネスブック』だが、『ギネスブック』とはギネス・ビールの販売促進のために出版されたものだ。

ダブリンにはアイルランド最大の教会であるセント・パトリック大聖堂がある。セント・パトリックは5世紀にアイルランドにキリスト教を布教するにあたって、アイルランドの人々の信じていたドルイド教を否定することなく、その上にキリスト教をつなぎ合わせたとされている。このセント・パトリックを讃える日がセント・パトリック・デーで、3月17日である。この日はダブリンをはじめアイルランド中がアイルランドのシンボルカラーである緑に彩られる。現在はアイルランドに限らず、ニューヨークをはじめ世界各地でセント・パトリック・デーは祝われている。

ダブリンにはこの他にも興味深い歴史的建造物や博物館がある。たとえばアイルランド国立博物館には国宝のタラのブローチをはじめ、素晴らしい工芸品が展示されている。またジェイムソン・ウィスキー蒸留所があり、ここではアイリッシュ・ウィスキーの歴史や製造過程を学ぶことができる。機会があればダブリンを是非訪れられることをおすすめしたい。

さわだ としあき（教授・西洋史）